「原音」から暗闇を極彩色に染める人

うおずみ千尋詩集『牡丹雪幻想』に寄せて

うおずみ千尋さんの詩には、鋭い音感や色彩感覚があり、それらの音色から立ち上がってくる生き生きとした想像力がある。さらに想起される光景には時に狂おしい情念が宿っているけれども、じつは誰よりも理性的で他者への思いやりに満ちた豊かな情感が詩行に宿っているのだ。今まで四冊の詩集を出しているが、第一詩集『凌霄花』は朱色、第二詩集『犀川大橋』は紫色、第三詩集『形』は緑色といった布地を表紙にし金か銀の箔を押した装丁で、第四詩集『憶』は青色を基調とした紙の装丁だった。うおずみさんは自分で編集をし、装丁の色彩なども希望を伝えて製作してもらったという。これらの装丁からも分かるとおり、うおずみさんは自らの美意識を貫いてきた詩人であった。第一詩集が一九九五年で第四詩集が二〇〇三年だから、十年も経たない間に四冊もの詩集を出してきた。その間にうおずみさんは第二詩集の校正をした後に、患っていた緑内障によって視力と光を失ってしまった。しかし失明の前には視覚障害者用のパソコンを習得し、見えない困難さを抱えながらその後に二冊の詩集を出した。そして今回、五冊目の詩集『牡丹雪幻想』を刊行した。失明した詩人としては十七世紀のイギリス詩人ジョン・ミルトンがいる。彼は四十五歳の時に失明したが、十年近くの時間をかけて六十歳の時にイギリス文学でも最も名高い壮大な叙情詩『失楽園』を書き上げた。うおずみさんも失明から十年近くの時を経て今回の詩集に到達した。うおずみ千尋という詩人が、どうして誕生し、いま私達に何を語りかけているのか、彼女の四冊の詩集と新詩集を紹介しながら考えてみたい。

第一詩集『凌霄花』は二十篇の詩が収録されているが、「凌霄花」という詩が三篇連作されている。

〝あなたは
だれからも好かれるけれど
決っしてだれにも愛されない〟

その
ただよう香りでさえ人の脳を冒し
花芯の蜜が眼に入れば
失明すると
伝えられて来た花でした。
奇異なものでも見るように眺めながら
だれも
決っして近づこうとしないわけを
花自身が
いちばん良く知っていたでしょうに。

華やいで燃えるより
しずかに愛しつづけることの意味が
少しだけ
分かりかけていた矢先でした。
忘れていた凌霄花(はな)の
呪われた習性を
思い出してしまったのです。
決っしてだれにも愛されない
それでもなお身を焦がして愛されずにいられない
ひたすら
真夏の陽射しをふり仰いで
咲き誇るべく
ところかまわず絡みつかねばならない
哀しい花でした。

(第一詩集『凌霄花』の「凌霄花」Ⅱ)

うおずみさんは凌霄花という古来から観賞用に植えられてきた夏の花に自分を投影させている。この凌霄花(霄(そら)を凌(しの)ぐ花)がなぜ「のうぜんかずら」と読まれるのか、いつも首を傾げるが、この花は人が夏バテになる頃に猛暑の中を華麗な橙色で咲き続けるさまは、呆れるほどの生命力を感じさせる花だ。うおずみさんは情が深すぎて相手を情熱で焼き殺しかねない悪女のイメージをその花に直感する。そして自分の心の奥底に眠る愛することの業の深さを見詰め、「華やいで燃えるより／しずかに愛しつづけることの意味」を考え始める。うおずみさんは花に感情移入しながらも、その花の業のようなものを反面教師として否定し、無償に愛することの宿命を試練として引き受けようとする。そこに「しずかに愛しつづけること」の本当の意味が読むものに染みわたってくる。うおずみさんは愛の詩人であるけれども、実はとても理性的な詩人であると私には感じられるのだ。

うおずみさんは緑内障を抱えながら愛するご主人を長い看病の果てに失ってしまう。うおずみさんは伴侶も自らの健康など最も大切なものを無くしてしまうのだが、生きることの希望を決して失わない。その強さとは何なのか。苛酷な情況でも生きるために「ところかまわず絡みつかねばならない」という生命力を肯定しているからだろう。以前テレビ番組で放映していた一歳で失明した息子を殺して自分も自殺しようと考えた父親が、病院のベッドから降りて手摺りやあらゆるものを手で確かめている息子の姿を見て、子の生きる力から教わったことを話していた。その子は十五歳になり視覚障害者のサッカーの世界大会の日本代表に選ばれた。目が見えるようにドリブルし、仲間に誰よりも正確にスルーパスを出せる。道を歩いていても障害物があると気づくことが出来る。

目が見えないことで人にはそれに代わる能力が顕在化しているのだと思われる。うおずみさんはいつか視覚が無くなることを予見して、この当時から困難に立ち向かっていく自己の中の新しい可能性を探っていたのだろう。

——あした　また来るわね。
返事をするはずのない
無意識の闇に落ちたひとの
けれども
まぎれもなく温かな手を
にぎりしめる。
（略）
——あした　また来るわね。
終わることなくつづくあしたなのに
もうすぐ終わるときが来る
あなたの
あしただから
きょう　さようならは言うまい

微かな音をたてて閉まった
病室のドアの
内と外との小さな未来に
——あした　また来るわね。

（第二詩集『犀川大橋』の「わかれの言葉」より）

第二詩集『犀川大橋』の十九篇はご主人の七回忌にまとめられた追悼詩篇だ。ご主人の闘病生活の回想の中で、たとえ会話が出来なくとも語り続ける言葉である「あした　また来るわね」は、例えようもない優しい言葉だ。どんな情況下でも希望を捨てない含蓄のある言葉だ。明日また来る時には、奇跡が起きて回復しているかも知れない。生死を超えても語りかけようとしている。うおずみさんは「温かな手をにぎりしめ」その絆を決して切ろうとしない。「きょう　さようならは言うまい」とは今日を精一杯生きることを目差しているものだけが語れる言葉なのだ。「わかれの言葉」は別れの言葉ではなく、ひととき離れるだけで、また明日には会えるのだという希望の言葉なのであり、さらに言うなら別れの言葉などはありえないのだと語っているのだと思われる。「わかれの言葉」の不可能性をこの詩は告げているかのようだ。うおずみさんにとって言葉をかけるとは、共に生きていることを実感することであり、絶望の中から他者に手渡す希望そのものなのだ。

梅雨空は肌寒く、わたくしには苦手な季節です。それでも、
雨に打たれながら凛として咲き誇る、花菖蒲や紫陽花の大
輪を想い浮かべると、なぜか不思議なエネルギーが湧いて
まいります。
このところ、形よりも色に傾斜してしまうのは、やはり
眼のせいでしょうか。低い雲の隙間から僅かに射し込む薄
ぎぬのような陽射しに燃え上がった、紅、紫、青の花の群れ。
あの日、網膜に焼きついた花たちの艶やかさ、あれは、決
して手で触れて確かめることはできないのです。視覚を失
いかけている者にとって、色彩とは、見えることへの限り
ない執着と憧れ、まさに光そのものなのだと、いまのわた
しくしには思えるのです。
明日という不安な日の、渡ってゆかねばならない小さな
橋を照らす、あかい光あおい光。あの菖蒲園での一日を想
い浮かべながら、わたくしは又エネルギーを沸き立たせ、
あたらしい詩の世界へ踏み込んでゆけたら、と思うのです。

（第三詩集『形』の「六月の手紙」）

私はこの詩を読み、うおずみさんがなぜ眼が見えないのに詩を書き続けることができるのか、そのことを可能にする思いが少し分かった気がした。私が散歩をして野の花や樹々を見ることと同じ気持ちで、うおずみさんは野に出てそれを視覚以外の感覚で観ているのだろう。早朝私が野の花を見る時には、新鮮な気持ちの中に先ず飛び込んでくるのは、鳥の鳴き声であったり、湧水の流れる音であったり、早朝電車の音であったり、また樹木や草花の匂いであったりする。静寂を破る音や匂いに敏感になっている自分に気づき、新鮮な感覚が甦ってくる瞬間なのだ。そのようなことも視覚障害者にとって特別なことではないのだろう。「視覚を失いかけている者にとって、色彩とは、見えることへの限りない執着と憧れ、まさに光そのものなのだ」と語るうおずみさんは、見ること以外の他の感覚で観ることの本質を語る賢者のような言葉を伝えている。見えなくなっても時間が継続される時に、雨の音を聞きながらかつて見えていた花菖蒲や紫陽花の色彩をありありと想起することが生きている証になる。多彩な光を想起することで「エネルギーを沸き立たせ、あたらしい詩の世界へ踏み込んでゆけたら、と思う」と言ううおずみさんは、ブラインドサッカーをする少年のように色彩を暗闇に描いているのだろう。残された感覚で描いて観ようとする意志こそが色彩をありありと現前させるエネルギーになっているのだろう。

杉林を抜けると
確かにここは　川の淵である
岩肌を落下する水音が
静寂を切って
乱反射する白い光の帯のようだ

わたし達は

立ち昇って来る微かな香りを嗅ぎながら
ゆっくりと草を踏みしめた
川向こうから
高く迫る山
囲むように背後に伸び上がる樹林
ひとつ　ひとつ
あなたは丹念にスケッチする
私の前に風景が立ち上がる
色彩が光り出す

「空のブルーは
この上にほんの僅かなのね？」
見上げた途端
眩暈と共に天の裂け目から滑り落ちて
わたし達は
燃え上がる樹林
緑の壺の底に居る

（第四詩集『憶』の「緑の壺」）

私は眼が見えるものがいかに言葉を消費し言葉を汚しているかをうおずみさんの語る言葉によって教えられる。「岩肌を落下する水音が／静寂を切って／乱反射する白い光の帯のようだ」のように、うおずみさんの詩の魅力とは、言葉を発する根源にある「原音」のようなものを聴き取り、その響きでもって詩のイメージを展開させていることだろう。「原音」とはうおずみさんと同郷のいわき市の詩人で蛙を書き続けた草野心平の詩の言葉だが、うおずみさんの詩にもその「原音」を私は感じてしまった。その魅力をこの「緑の壺」は余すところなく伝えている。緑の壺の中で人は疲れた心や体を癒され、再び生の現実に戻っていってほしいという、うおずみさんの新鮮な感覚であり、生きる知恵であり、「静かな愛」が届けられている。

いわき市とは、福島県の太平洋に面したかつては常磐炭田で賑わった山と海が隣接する町だ。偶然にも私の父母もこの場所の出身で、子供の頃は夏休みによく遊びに帰っていた故郷だった。私の最も古い記憶のひとつは塩谷埼灯台の下にある海水浴場で太平洋の荒波に足をさらわれて巻きこまれ、浜辺に打ち上げられて塩水を飲んでしまった記憶だ。波が背丈を越えて落ちてくる経験は海の波というものが何であるかを教えてくれた。海のエネルギーの底知れなさは、いまも故郷への憧れとなって刻まれている。うおずみさんも同じ海を見てその場所で成長した。今、うおずみさんは金沢で日本海の海音を「原音」のように聴き入り、いわきの海の光り輝くさまを思い描いているのだろう。

届いてしまいそうな空を見上げ
傘を開く
いつの間にか
花びらに似た雪片が
肩に
袂に降りかかり
錆朱色の細い矢模様の先に　瞬間留まっては
小さな
水滴になる

通りの向こうのバス停にも
雪は舞っている
垂れ落ちた窪みから零れ出て
何と
軽やかな片々

バスを降りてきた男(ひと)の
黒いコートに降りかかる
胸に裾に降りかかる
城下町の凍てる石畳
向こう側と
こちら側
佇ち尽くす無言の距離に
白い花が

舞っている

（「牡丹雪幻想」）

新詩集は詩集題の「牡丹雪幻想」から始まる。うおずみさんは異郷の金沢でいま一人で生きておられる。しかしその内面はありのままを受け入れて、一日一日大切にして詩作を続けている。牡丹雪のふる音から懐かしい男(ひと)が自分に会いにやってくることを幻視する。その光景は、着物の色で気品のある錆朱色の傘を差しながら出迎える瞬間なのだ。たぶんその男(ひと)は亡くなったご主人であるかも知れないが、ご主人が好きだった和服の色の傘で出迎えたのだろう。その錆朱色に牡丹雪が舞い降りていくのは、何とも言えずに美しい。うおずみさんはその男(ひと)と無言の会話をし続けている。錆朱色は二人にしか分からない魂を共有する色なのかも知れない。牡丹雪の降り注ぐ「原音」を聴きながら、うおずみさんの暗闇は、白色の世界に変わる。そこから錆朱色の大きな傘の中で、二人の語り尽くせない言葉が極彩色の牡丹雪のように読む者に降り注がれるのだ。うおずみさんの生きることの意味を根源から問うてくる詩篇を、多くの苦悩している人達にも読んで欲しいと願っている。